



時の流れのなかで（長谷川善計教授退官記念号）

長谷川，善計

(Citation)

社会学雑誌, 11:1-56

(Issue Date)

1994-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81010829>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010829>



時の流れのなかで

長谷川 善計

一 昭和の家

もう二、三年も前のことだが、墓掃除をしながら、いずれ自分もここに埋められ、墓石のこの場所に戒名と俗名とが刻み込まれるなあということが頭をかすめた。それまでだって春秋の彼岸と夏の盆の少なくとも三回は毎年墓掃除に来ているのに、これまではついぞそんなことを考えたこともなかった。しかし、還暦ともなると心境に変化をきたすものとみえて、死というものがだんだんリアルな問題になりはじめるようだ。それにしても、家の制度というものは、生まれた時から死後の場所までをきちんと決められているのだからすごいものだとも思う。

けれども、そんな思いが頭をかすめたとたんに、私の胸は甘美な思いで満たされた。ここには祖父

もいるし祖母もいる。父もいる。母は九十歳でまだこの世で一緒に暮らしているけれども、私がここに来たときは、おそらく他家に嫁いだ姉を除いて、私が育った時の家族の全員がここに揃うであろう。そのなかで私は皆に見守られながら、幼児に帰って祖母の膝のうえでこんこんと睡りつづきたい。祖母はきつと私の髪の毛をやさしく撫でつづけてくれるであろう。そんな甘美なイメージが私の胸中にこみあげてきたのである。

私はキリスト教徒ではないから死んで神のもとに召されるというイメージは湧いてこない。また地獄に堕ちるとも極楽往生するとも思われない。ただあるのは現世の家族の生活が、死後にも連続していて、もう一度過去の家族生活が回帰するというイメージだけだ。けれども、そのイメージに私は甘美な思いと満足感にひたることができる。私は六十歳を過ぎてもなおそうしたイメージを抱きつづけている自分を幸福だと思う。私がそうしたイメージを抱くことができるのは、ひとえに私をはぐくみ育ててくれた祖父母や両親のおかげであろう。私は自分の育った家族に深い愛着と強い感謝の念をもっている。もしお前の人生にとって何が幸福であったかと問われるならば、私は真先に自分の育った家庭ですと答えるであろう。

しかし、私が生れ育った時代は決して「良き時代」ではなかった。また、家運も私の生まれた頃から大きく傾きはじめていた。

私は昭和五年（一九三〇）九月二十九日に神戸市に生まれた。父はまだ学生の身分であった。栄町五丁目五番地で貿易商を営んでいた祖父に、父は板宿に小さな別宅を借りてもらい、生活費も学費も

親がかりで夫婦と姉と私の子ども二人で新婚生活をしていたのだから、贅沢は出来なかっただろうけれども、結構なご身分だ。しかし、結構なのはその頃までやがて大きな破局がやってきた。

昭和五年といえば、アメリカのウォール街の株の大暴落に端を発して、またたくうちに世界中を大恐慌におとし入れた一九二九年の世界大恐慌の翌年である。ただ日本の場合、すでに昭和二年（一九一七）の東京渡辺銀行の休業からはじまって深刻な金融恐慌がひろがっていたから、世界恐慌はそれにさらに大きな追い撃ちをかけた恰好になった。そして昭和六年（一九三一）には満州事変が勃発し、私が小学校に入った昭和十二年（一九三七）には日中戦争へと発展していった。それがさらに太平洋戦争へと拡大していったのは、私が小学校五年生の昭和十六年（一九四一）のことであった。この頃から私たちの子どもの世界にまで戦争の影響がおよびはじめたが、それでも私が中学校に入った昭和十八年（一九四三）当時は、まだそう困窮した状態にはなかった。なんとか皮靴（編上靴）も調達出来たし、校内では上履きの運動靴に履きかえることも出来た。新調の帽子や制服も配給された。授業も正常に行われていた。しかし翌十九年（一九四四）からは事態は急速に悪化していった。先生方は歯が抜けるように軍隊に召集され、その分軍事教練の時間が増していった。第二グラウンドをひっくり返して芋畑にする作業もさせられた。また刈藻島に高射砲陣地をつくるために土運びにかり出され、さらに三菱電機での工場動員となって毎日工場通勤となった。食糧難もしだいにきびしくなって成長盛りのわれわれにはそれが一番つらいことであった。それでも、私たちにとって幸いだったことは、賀須井校長先生は若い時にアメリカに留学なさったためか、リベラルな思想の持主だった。軍国主義的な言辭を弄される先生もなかったが、そんな校長先生の影響のためか当時としては珍し

く非軍国主義的な雰囲気があった。

そんななかで、私がいまでも強く印象に残っている怖しさは昭和二十年（一九四五）三月の神戸大空襲であった。私は旧神戸市の中央の北端の大きな盆地のようなところに住んでいるが、山の彼方の空がみるみるうちに真赤に染まった。やがて私の頭の上を何百という火の玉がついた焼夷弾がザーというすごい音をたてながら斜めに横切って近くの小学校に命中したときは生きた心地がしなかった。翌日近くを歩いていると焼死体を山積したトラックに出合った。どの遺体も服からはみ出した手足は煙にいぶされて異様などす黒さをしていた。その足先にはまだボロ靴がついているのが余計にいたましさを感じさせた。それらの遺体は火葬場の庭で山積みされたまま火葬されたという。さながらに地獄絵図をまのあたりにみる心地であった。その頃から極度の食糧難におちいり、栄養失調のためか身体に吹出物が出来るようになった。医者には薬をくれたが、小麦粉を水でとかけたようなものでなんの効き目もなかった。あの戦争がもう一年長びいていればもっと沢山の餓死者が出たことであろう。私の母も祖母も神戸から二時間ほど北の三木市の農村の出身だから、その縁でなにはどうかのヤミ米を手に入れていたが、それも毎日の必要な食糧のわずかなたしになったにすぎない。裏の山林を開墾して南京やさつまいもやトマトなどを作っていたが、それも一家の食糧をまかなうにはわずかなたしになったにすぎない。最後になると配給されるのは豆カスだけで、これだけはいかに腹が減ってもノドを通るしろものではなかった。そして、敗戦後は猛烈なインフレ状態となって国民の生活は困窮のどん底におちいった。いまから言えば、よく生きてこられたなあと思うが、軍国主義の末路と旧体制の崩壊のいきつく先はこんな状態であった。

そんな時代のなかで、私の家運も傾いていった。昭和の初期の恐慌のなかで祖父の柴町の店も閉店に追い込まれた。その店は合名会社や合資会社の形にはなっていたが、その内実は番頭・手代・丁稚の古い形態そのままであった。一家は柴町から私が現在住んでいる家に引っ越して来た。店のあとは毎日新聞の神戸支局となった。皆が移り住んだいまの私の家は、明治二十年頃に寺の所有の山林を数町歩買い取って曾祖母が隠居していたところである。私がもの心をついたのは、この家に一家が移り住んでからであるが、古ぼけた二階建と平家の二棟の家屋の両端に二つの納屋があって、およそ都会らしからぬ家であった。ところが、私がもの心ついた頃には、両親はこの家にはいなかった。母の身体具合が悪かったので、歩いて七、八分のところに小さな家を借りて夫婦だけで別居生活をしていった。両親も同居するようになったのは、私が小学校に入学する前後であった。だから、私は祖父母と姉と「ねえや」と呼んでいた女の子と、それに「シロ」という犬一匹と一緒にこの古ぼけた家で幼児期を過した。

家の前は原っぱでそのむこうにポツリポツリと家がある程度だから年齢の五、六歳もちがう子が数人寄って遊ぶしかなかった。そのなかでも私は一番小さかった。原っぱにゴザをひいてままごと遊びをしたり、夏の夜は花火や提灯行列をして遊んだ。提灯行列というのは、ピンクやブルーの地紙に草花の絵がある小さな提灯をさげて暗がりの中を子どもが行列して歩くのだが、先頭をいく年かきの子がきまつて「おばけや！」と叫ぶ。すると皆は蜘蛛の子を散らすようにいっせいに逃げ出すのだが、私は風呂から上がると浴衣を着せられているし下駄はきだから大きな子のように早く走られない。ころんだり、下駄を飛ばしたり、提灯がつぶれたり散々な目にあった。それでも一種のスリルがあっ

たから性懲りもなくいつもついていった。のどかなものであった。

土曜か日曜には、ときどき父が迎えにきて両親の家にいった。しかしそこで泊ることはなかった。夜に父は寝入った私を背負って送ってくれた。

最初にいったように、墓に入っても祖母の膝で眠りたいというイメージを私が抱くのは、やはり幼児期に母から離れていたからであろう。ばば様の猫可愛がりというが、祖母にとって私はベツトみたいなものであったのであろう。私にとっても、肌の白いデップリと肥えた祖母の膝は座り心地がよかったし、抱きしめられるとその肌の匂いも心地よいものであった。いつか「ばば様育ちの人間は何文か安い」という諺を読んだことがあるが、なるほどと思ひあたるふしがある。

幼児期の私にとっては祖父は遠いこわい存在だった。かれは明治元年（一八六八）に生れて、敗戦の昭和二十年（一九四五）の秋に他界した。かれの生涯は、日本近代の旧体制とともに生き、その崩壊を見届けて死んでいった。だから私は十五年間祖父と一緒に暮らしていたが、その肌にふれたのは、あとにもさきにも唯一度だけしか記憶にない。その貴重な体験というのは、私が四、五歳くらいのにきに祖父が淡路島の団体旅行に私を連れていってくれたときだ。連れていってくれたといっても、道中の私の世話は同行のおばさんにまかせきりで、ただ一度だけ私の手をひいてくれたが、私にはこわいものに手をつかまれているような気がした。かれは、こまごまとした幼児の世話など出来るような人ではなかった。ひと前で子どもを抱くようなことも出来なかったようだ。これは後年に父から聞いたことだが、祖父は襖をびったりと閉めて、なかで赤ん坊の姉を抱きしめていたそうだ。それを知らないで襖を開けた父にその姿をみられると、なんともバツの悪そうな顔をして、「この子をひとりで

おいておくとかない」とかなんとか妙ないい訳をしながら出ていったそう。孫に愛情を抱いても、それをひと前で素直に表現することは、男の沽券にかかわることであつたのだらう。感情や情感の極度な自己抑制が男たるものの生き方であつたのであらう。そういえば、私は祖父が大声で笑っているのをみた記憶はない。かれの涙をみたのは、昭和十九年（一九四四）の春に祖母が他界し、その棺が閉じられようとするとき、祖父の目から数滴の涙が静かにこぼれ落ちるのをみたのが、あとにもさきにも唯一度だけであつた。それからめつきりと元気のなくなつた祖父は一年半後に後を追うようにして他界した。

その点、同じ明治生れであっても、四十年（一九〇七）生れの父はまるで違つていた。かれはやたらと子どもにキッスをするのが好きな人だつた。しかし、される子どもの側からすればタバコの臭いがして髭のそりあとがチクチクして決して心地よいものではなかつた。

小学校に入学する頃から、母も元氣になつて一緒に生活するようになった。その家族生活は、昭和期の都会では珍しいほどに家の伝統意識が強かつた反面、また欧化主義もきわだつて強かつた。この二つの面が奇妙な結合をしているところに、その特徴があつた。

祖父は典型的な明治の男であり、すぐれて剛直な精神の持主であつた。情感をひと前でさらけ出すことには極度に自己抑制的であつた。文芸に対してもあまり関心をもたなかつた。文学や芝居のような情感的でフィクショナルな世界は、かれにとつては女・子どものすることであると考へられていたようだ。その点で徹底して冷徹でリアリストであつた。しかし、この明治人は、「文明開化」の時期

に青年期を過し、その空気を身につけた人でもあった。強い伝統主義と開明主義とが共存している明治人のひとつのタイプの典型のような人であった。

父の場合は、明治生れといっても、「大正デモクラシー」の空気を身体いっぱい吸い込んだ人であった。祖父の剛直さと伝統主義にはいささか辟易としているようであった。といって志賀直哉の『和解』にみるように、正面から祖父と対立することはかれには出来なかった。敬して遠ざかるというのが祖父に対する父の態度であった。それによって家族の平穏が保たれた。かれは人間の細やかな情感やヒューマニティを大事なものと考えた。新劇や外国文学に強い趣味をもっていた。苦難に打ち勝って生きるというようなことには全く無縁の人であった。いかに優雅に生きるかということがかれの趣味にあっていた。その点はいまの若ものと似ている。同じ明治生れで、実の親子でありながら、祖父と父との間には、大きな時代の断層があったし、気性の違いがあった。おそらく祖父にしてみれば、そんな父は「頼りない息子」と内心では舌打ちをしていたのかもしれない。しかし、そんな父でも、炊事・洗濯の類については女の仕事と決めつけていて、その種のことは一切手をかそうともしなかった。その点では全く古い男であった。

私は、祖母や母からは大きな情緒的満足と安定感を与えられた。また、衣食の生活面での世話すべて女性に依存して育った。しかし、精神面において祖母や母から影響を与えられたという自覚は全くといってよいほどない。精神の形成にとって大きな影響を与えられたのは、やはり祖父と父からであった。

祖父と若くして死んだその弟の残した蔵書には、和綴木版刷りの四書五経の類の漢書が沢山ある。

それは旧来の伝統どおりに習わされたであろう。祖父はしばしば橋本関雪画伯の尊父海関先生に教わったことを口にしていた。そして祖父が生涯にわたって身近で最も尊敬していたのは、海関先生と母であつたようだ。政治家としては犬養木堂に敬倒していたように思われる。祖父の言によると、かれは若い頃いささか放埒であまり学問に身を入れなかつたようである。その点大人しくて学問好きの弟の方に海関先生は期待を寄せていたようだが、二十歳を少し過ぎた歳で若死した。しかし、そんな祖父も海関先生には可愛がられたようで、先生に対する敬慕を生涯もちつづけた。海関先生に書いてもらった書は、かれにとつての宝ものであつた。孫の私からみれば、家父長の権現みたいに思える祖父が、母への思慕をもちつづけていたことは、いささか奇異に思えたが、かれもまた人の子であり、いまして思えば、マザー・コンプレックスの強い人であつたように思える。祖父は老年になつても、ときどき母の夢をみたようで、そのときだけはきまつて家族の者に夢の模様を話した。

祖父とその弟とは、漢学を習わせられながらも、その関心はむしろ洋学の方にむいていたように思われる。やはり「文明開化」の時代の子であつた。かれらの残した蔵書のなかには、明治六年（一八七三）に文学社から発行された『附音図解英和字彙』がある。これは一、一〇〇頁ほどの大きな皮表紙のものである。明治十九年（一八八六）の訂正増補の第二版は三円八十銭とあるから当時では相当高価なものであつたのであろう。

そして面白いのは、この辞典のなかにはさみ込まれているメモである。お世辞にも達筆とはいかぬる文字だが、私にはそれを咄^わう資格はない。私が字の下手なのは祖先伝来の遺伝だと思ひ当るだけである。それはともかくとしても、そこには、ミルの代議政体、論理学体系、経済学原理、スマイル

の自助論、スペンサーの教育論、ギゾーの文明史など十二、三冊の書名が書きつらねられている。それらの本はいまは残っていないから、どの程度それらの本を読んだのかはわからないが、これからはこの方面の勉強をしなければならないという強い情熱をもっていたことは伝わってくる。また、明治十年（一八七七）に、陸軍士官学校学科部が、ロパンとシャルウエーの原書を翻訳して作成した『化学教程講本』も残っているから自然科学的知識の吸収にも熱心であったことがわかる。

私は、かつて西田幾太郎氏が和辻哲郎氏に、明治初年生れの人は、天皇制に対してあまり強い崇拜の念をもっていなかったと話したというのをなにかで読んだ記憶がある。そのとき、私は、それは祖父にもあてはまると思った。かれが、明治天皇に対しては人格的な敬愛の念を抱いていたことは確かである。しかし、それは明治天皇の個人的な人格に対する敬愛の念であって、天皇制そのものに対する崇拜の念ではなかった。

また、かれは日中戦争には終始反対の態度をとりつづけた。それを家族の者だけでなく、他人に対してもしばしば口にした。国策や官憲の抑圧などはまるで頓着していなかった。かれの関心は、儒学よりも洋学に向っていたが、かれらの世代の者にとっては、やはり中国は日本にとって学問や文化の師であるという観念があった。そのうえ、かれは貿易商として多くの中国人と親交関係をもっていた。中国の貿易商が商人でありながら高い教養をもち、信用を重んじ、人間的スケールの大きなことに深い信頼と尊敬の念をもっていた。日本はたとえ軍事的には勝利することが出来ても、日本人には中国のような大国を支配し統治出来るような器量も能力もないというのがかれの認識であった。かれの国際関係における彼我の力関係の認識は、驚くほどに冷徹で正確であった。

そして、その認識は、軍国主義の進行と日本軍の勝利によって、ファナティックなまでにナショナリズムが昂揚していった社会風潮のなかでも微動だにしなかった。だから太平洋戦争がはじまったときも、かれはこの戦争に終始反対だった。必ず日本は負け、不幸な状態におちいると主張した。それを誰はばかることなく口にした。その頃に、そんなことをいおうものなら国賊扱いにされ、官憲に抑留される危険が多分にあった。さすがに父はそれを怖れた。それで「そんなことは、あまりひと前で言わない方がいい」と忠告していたけれども、祖父は父をジロリとみただけで、きき入れる風もなかった。私も軍国少年ではなかったけれども、祖父の認識は理解出来なかった。日本の敗戦など切実な問題とは考えていなかった。ただ「おじいさんは年寄りだから、時局の認識についていけないのだろう」というくらいにしか考えていなかった。しかし結果は、祖父の認識の方が正しかった。昭和二十年（一九四五）八月十五日の敗戦のラジオ放送をきいて、そのことを午睡から覚めた祖父に伝えたけれども、祖父の返事は「ああそうか」という唯一言だけでなんの感情も示さなかった。それは永井荷風の『荷風日乗』に誌されている敗戦の日の記述と同じような反応だった。

私はその時からひそかに自分の愚かしさを恥じるようになった。どうしたら、世間の時々の風潮にわずらわされることなく、事態を冷徹に正確に見通すことが出来るようになるのであろうかということが、私の大きな課題となった。それまでも、私がおかしなことをいおうものなら、ただちに祖父から、「お前の目はどこについているのか」とよく叱られた。祖父にすれば、「ものごとを目先にとらわれずもつと正確に深くみよ」といいたかったのだろうけれども、中学生の私には、「目はここについてます」といいたい反抗的気分もなくなかった。ただ祖父の威厳の前では、それを口にすることは

出来なかった。私が祖父の偉さと聡明さに敬愛の念を抱くようになったのは、むしろかれの死後に、私が年をとるにしたがって深くなってきた。それだけに、かれが私の精神形成に投げかけた影響はいっそう強くなってきたように思われる。

しかし他面では、祖父は強烈な家意識の持主でもあった。かれにとって、家の継承と存続とは、なんと守り抜かねばならないことであつた。

私の家族には二つの家名があつた。なぜそうなつたのかを私は正確には識らないが、祖父の弟は、祖父とは別の家名を相続していた。しかし若くして他界したので絶家となつた。それを絶家再興して父に継がせた。したがって祖父と父とは姓が異なつた。そのうえ父は独り子だから、今度は一番最初に生まれた姉を祖父の子として入籍した。私は父の姓を継いでいるから、父・母・私と、祖父・祖母・姉とは別姓であつた。家族としてはひとつなのに、家としては二つなのである。私は生まれたときからそうであつたから、そのことをあまり不思議とも思わなかつたが、まわりの子どもたちは、姉と私が別姓なのを不思議に思えたらしい。よく「なんでや」ときかれたが、私には気になることでもなかつた。

日本法制史の中田薫氏は、日本の家の本質のひとつとして「祖名継承」ということを重視されている。しかし、この見解は、他の法制史家や家理論ではほとんど無視されているように思われる。だが、私は、中田氏の指摘は、自身の体験に照しても重要なことだと思つてゐる。もちろん、家禄や家産が家にとって重要なものでないというのではない。貢租を納められなくなつた農民の家は、「潰家」として「一軒前の家」としての資格と身分を喪失した。武士の場合、「家名断絶」は封禄の召し上げを

意味した。家産や家禄は、家の継承・存続にとって不可欠な条件ではあったが、「家名」は単にそれだけをシムボライズするものではなかった。それらを超えて、「系譜」や「集団帰属」をもシムボライズしている。「系譜」は、祖先崇拜の宗教的観念によって「聖化」されたものである。そして、他人に「名を与える」ことによって、この聖なる系譜のなかに組み込むことが出来た。「名」は系譜と集団帰属の重要な精神的紐帯でもある。そこに「名」にこだわる根拠がある。

祖父は、父に長谷川の家を継がせることによって、自分の財産の多くを父の名義に切り替えた。だから父は生まれた時から地主であった。ただし、それは「名義上」のことだけであって、その実質的管理権は終生祖父の手にあった。

そして、もっと重要なことは、祖父と正妻との間には、祖父が四十歳になるまで子が出来なかった。この正妻は、家の内でも世間でもれっきとして正妻と認められていながらも、子どもが出来なかったためか入籍されていなかった。だから父は祖父の実質上の正妻の子ではない。父の実母は、祖父よりもずっと若い女性である。しかし、この女性は世にいう妾ではない。明石藩士の家の娘であり、その兄は工場を経営していた人である。そして曾祖母の隠居家と一緒に生活していたのである。おそらく正妻に子が出来ないで、曾祖母がたまにかねてこの女性との関係をと、はからったのであろう。しかし、店をずっと実質的にとりしきってきた正妻を離縁するわけにもいかず、結局父は栄町の本宅で正妻のもとで育てられた。正妻は、父を実子のように可愛がっていたというが、世にいう「よく出来た女」であつたのであろう。しかし実母も正妻も父の少年期にともに他界した。だから私の知っている祖母は祖父の三番目の妻である。

実母が正妻よりも先に逝去したので、その葬儀をどこするかということでもめたそう。正妻はまだ存命していたから本宅で葬儀をするのには問題があるし、さりとて実母はれっきとした家の娘であり、その親類の手前からも、また嫡子の実母であるという点からも、それ相応の儀礼をしなければならぬので、結局は本宅で葬儀をとり行ったそう。家の存続のためには、その内実においていくつもの不自然なことを積み重ねなければならなかったのである。そうした無理を重ねながらも、それでもなお家は絶やすわけにはいかなかったのであろう。

戦前には家のなかに三つほどの神様が祀っており、庭の隅にはいまでも稲荷の社があつて、正月と初午の日にはこれまで母がお供えをつづけてきた。御飯はいつの間にか野良猫がやってきて食べる。夏には野良猫がそこに飛び上つて、花立ても、ローソク台も、キツネも地べたに蹴散らしてひる寝をしている。それでも一向に罰はあたらずだ。

戦前には、歳の暮になると祖母がどこからか神様のお札をもらつてきて、竈かまどや炊事場にも新しいお札が祀つてあつた。正月には便所も含めてすべての神様にお燈明とお供えをするから、家中がピカピカと明るかつた。

けれども、そんな神祀りは儀礼としてやっているだけであつて、誰もがあまり信仰心をもっているわけではなかつた。ほんとうに大事なものは「祖先崇拜」であり、その祭祀場所である仏壇であつた。

いつの頃からのものかは知らないが、古ぼけた大きな仏壇のなかに沢山の位牌が祀つてあつた。この仏壇は明治十何年かに家が全焼したときに、火がなかに入りかけているのを運び出したといういわくつきのもので、そういえば内部もお釈迦様も変色してきれいなものではなかつた。そんないわくつ

きのものだから、あだおろそかに扱うわけにはいかなかった。戦時中に空襲警報が鳴るたびに、私は仏壇から位牌をとり出して、二、三箇のダンボールに詰めて防空壕に入れ、警報が解除になるとまた仏壇に並べるという役をやらされた。古いものは字が刻み込まれてなくて墨で書いてあるから判読も出来ないような状態になっているが、過去にそんないわくがあるものだから、これだけは決して焼いてはならないものだったのである。家とは、こうした祖先崇拜の宗教的観念と結びつき、それによって「聖化」された存在だったように思われる。「文明開化」や「大正デモクラシー」のなかで積極的に欧化主義にとびつきながらも、こと家の問題に関しては、それを否定することも、乗り越えることもなかった。

また、年中行事や種々の儀礼についても、かたくなに伝統主義が守られた。年の暮には近所の分も合わせて沢山の餅を搗いた。祖父も父もその時には顔も出さなかった。屈強な男の人が家にいたからその人が全部一人で搗いた。その時は近所の女の人も手伝いに来たが、搗き手以外は女の仕事であった。正月がすぎて寒に入るとまた寒の餅搗をした。年に二回餅搗をするのである。

正月には表に家紋のついた幕を張り、座敷には京都の祭りを画いた金屏風の前に若松を生け、緋の毛氈もうせんをして大きな蒔絵の名刺受を置いた。正月だけは古ぼけた家の中がみちがえるようにきらびやかになった。正月の祝の膳は全員和服で一つ紋の縫紋程度の羽織を着用した。私は祖父のものを仕立てなおした五つ紋の羽織を着せられた。祖父、父、私、姉の順で祖母と母とは末座に座った。日頃は子どもの間では男女差別はなかったが、こんな時だけは、私が姉よりも上座に座らされた。私の膳だけは、父が生まれた時の箸初めの祝の時につくった朱塗で金の蒔絵の紋が入った美しいものだったか

ら、姉は私もあれがほしいといって駄々をこねた。祖母は、「あれは跡とりだから」とかいつてなだめたが、姉がうらめしそうに私を見たのを今も覚えている。「跡とり」とか、姉弟の間の男女差別がとび出すのはこんな儀礼の時だけで、ほかにはそんな差別は殆どなかった。

正月がすぎると初午、寒の餅搗、三月と五月の節句、七夕祭り、盆の行事、月見の行事、春秋の彼岸など随分と沢山の行事があった。クリスマスだけは外で食事をし、プレゼントを買ってもらった。それらは子どもにとっては嬉しいことであった。世間では満州事変が起こり、日中戦争がはじまっても、そんなことにはおかまいなしに太平洋戦争がはじまるまでは同じ生活様式が変りもなく続けられた。

父は逋信省に勤めていたが官吏の安月給であった。祖父は店をたたんでからはわずかの地代収入しかなかったと思われる。それなのに祖父は山林の宅地造成のために、高くてずいぶん長い石垣の構築工事を行った。それがやっと終わったあとで昭和十三年（一九三八）の神戸の大洪水に襲われた。地盤のまだ固まっていない石垣はあちこちが崩れた。私の家の裏の石垣も半分崩れて台所が土砂で埋まり、家屋も傾いた。それでまた積み直し工事が始まった。それらの金は、すべて借金と土地の切り売りでまかなわれたようだ。それでも生活は昔通りのままに続けられたから、結局は売り喰いのようなものだった。それは戦後のインフレーションの時期まで続いたから、二十年間くらいそんな状態だった。それは私の家が、旧中産階級の没落と新中間層の増大という社会の一般法則をしめしているものにはかならなかった。しかし、子どもたちにはそんな経済的なことは一切知らされなかったから、私たちは呑気に毎日を過していた。祖父も父も、子どもが金銭に関心をもつことを極度に嫌っていたからである。この世に生きているかぎり、金銭に無頓着でいられるわけではないが、それに「汚い」とか「賤

しい」ということを、かれらは「見苦しいこと」だという観念が強かった。

だから、いまにして思えば家の財政は火の車で売り喰いの状態だったはずなのに、祖父は、寺や神社や町の行事には相応の寄附をしつづけた。それは家の体面を重んじたためだろうが、地域の種々の役員としても積極的に働いた。その報酬としては、感謝状や表彰状という紙切ればかりがたまるだけだった。けれども、かれにとっては、それらの貢献は、地主たるものの責務と思っていたのであろう。それは村の庄屋や本百姓の責任倫理と相通じるものである。だから町のはずれにあった貧困家庭のひとのために、方面委員として生活扶助の申請のために熱心に働いていたし、ときには生活の面倒もみた。年末になると貧困家庭には餅代としてながしかの金が支給されるので、その申請書類の作成を父に手伝わせるために寒い中をきき取りに二人で出かけていくこともしばしばあった。

祖父が家父長として威厳を保持しつづけたのは、ひとつにはその剛直な精神と、いまひとつにはその規律正しい生活態度であった。かれは家の中にあってもつねに正座をして、あぐらをかくことはなかった。また、どんなに暑くても肌をみせることもなかった。酒も客人が来るときのほかは呑まなかった。食事作法もきびしかった。だから食事のときは、団らんというよりも、堅苦しい儀式のようなものだった。ことに夏の暑い時に正座をしているのは膝の裏に汗がたまって苦痛であった。早く食事をすませて逃げたい気分であった。たまに祖父がいけない時に、祖母は「今日はおじいさんがおつてやないから、みんな気楽に御飯をたべよう」といっていたから、妻たる祖母も随分と気づまりを感じていたのであろう。家父長制と一言にいっても、日々の家庭生活のなかで家族員に威厳を保つためには、家父長たるものは並大抵のことではなかったように思われる。子どものときから、そうした生

活態度をきびしくつけられていないと、家族員に尊敬や威厳を保ちつづけることは出来ないであろう。祖父は正座をし、父はあぐらをかき、私は寝そべっているように、世代を経るごとにだんだんとだらしがなくなってきたから、その点でも家父長制が崩壊するのは当たり前のことであろうと思われる。私は、あんなシンドイことをして威厳を保つよりも、たとえ軽蔑されても気楽に寝そべっている方がいい。あんなことは、私にはとてもまねが出来ることではない。

祖父は家族員に対して威厳を保ちながらも、祖母も父もそれぞれに生きるところがあった。祖母は、喰い道楽、衣裳道楽、芝居道楽の三拍子揃った享楽主義者であった。だから祖母につれられて街に出るのは楽しいことであった。うまいものを食べられるし、映画館や芝居小屋にも看板をみて面白そうならすぐ入っていった。年寄のくせに外に出るときは香水の匂いまでしていた。父も、祖父を敬して遠ざかり、自分の世界で好きなように生きていた。祖父にしてみれば、そんな祖母や父のすることが気に入るはずがないが、まあ好きにさしておけというくらいの気持だったのであろう。それにあまりとやかくいうこともなかった。ただ母だけが文字通りの「家の嫁」であった。かの女だけが質素で働き者でシツカリ者であった。おそらく祖父のお気に入り、母だけだったような気がするが、母には一切小言も文句もいかなかった。それには、外から来た嫁に文句をいうとつらからうという配慮も祖父にはあった。それも家父長たるものの思いやりと配慮であったのであろう。それにしても、あのような家族のなかでの母の辛抱強さには全く感服させられる。私は若い頃、森本薫原作、杉村春子主演の「女の一生」をみたとき、そこに戦前の母の姿がびつたりと重なり合ってくるような気がした。母と一緒に住むようになってから私は母の寝ている姿をみたことがなかった。

祖父はずっと和服だし、父も家にいるときは和服だった。それに祖母や子どもの分も含めて、すべて母が洗い張りをし、夜おそくまでかかってそれらを縫い上げた。炊事・洗濯・掃除など家事一切は、お手伝さんの女のひとと、祖母もたまには手伝うけれども、殆どは母が処理した。毎日が寝るひまもないほど忙しかったのである。

母は、「わたしがいなかったら、この家はとうにつぶれている」とよくいうが、よそから嫁に来て、夫の家をわが家として献身し守っていきこうとするところに、まさに「家の嫁」たる心意気と責任倫理があるように思われる。母にとっては、嫁に來た夫の家は、舅・姑の死によつて完全に自分の家になりきっているのである。

祖父の剛直な精神と威厳や嚴格さとは対照的に、父は柔軟で、リベラルで、人間的なやさしさがあつた。独り子で甘やかされて育てられたために、いささか我儘坊ちゃんなのれの果のようなどころがあつたが、その被害は母にシワ寄せさせられたのであつて、子どもに対しては細かな心遣いをしてくれるやさしい人であつた。父の育つた環境は、経済的には恵まれていたが、少年期に二人の母を失くし人間関係では恵まれていなかった。父は、子どもの時、祖父と二人きりで床を並べて寝ながら、夜中にふと目覚めて、祖父が死んだらどうしようと思つて無性に淋しさと不安を感じたと語つたことがあるが、その淋しさを自分の子どもには味わせないという思いが父には強かつた。だから子どもの養育には努めて気を配ってくれた。金銭的にも子どもに不自由な思いをさせたくないという思いがあつたから、高価なものは父が買つてくれた。

父と母とは金銭感覚にも大きな差があった。官吏の安月給の家計をあずかる母はとうぜんに無駄遣いや高価な買ひものは切り詰めなければならなかったのだろうが、それ以上に父と母の育った家庭環境に大きな差があった。母は農村の中農の娘で経済的にも文化的にも父のようにそう豊かな環境ではない。勤労、質素、儉約が子どもの時から身についた人である。それに対して父は経済的には恵まれていたから、自分がしてもらったことは、子どもにもしてやらなければならないという気持があった。それは経済的だけではなく、文化的にもそうであった。

私が五才の頃に、早稲田大学の演劇部が神戸青年会館で「青い鳥」を上演するからつれていってやろうと行って迎えに来てくれた。その日は私は祖母にくっついてお寺の団体旅行で京都智恵院に行くことになっていたから姉だけが行った。父は余程私もつれて行きたかったのか残念そうな顔をしたが、帰りに子どもの絵本を買ってきてくれた。

父の新劇に対する趣味がどういう機縁ではじまったのかは知らないが、先般亡くなった村瀬幸子さんの主人の北村喜八氏が、父の実母の縁づきにあたるので、関西で公演するときは入場券を売ってくれと頼まれてその手伝いをしたといっていたから、そんなことが機縁なのかもしれない。北村喜八氏は東京大学英文科の出身で、小山内薫氏の弟子にあたる人である。私も昔、父の蔵書のなかから岩波新書で小山内氏の書かれた原著を北村氏が補正した『芝居入門』（一九三九年）や、『新しき演劇へ』（一九二六年）を読んだことがある。しかし祖父にいわせると、「赤門まで出て、あんな芝居にうつつをぬかして……」といっていたし、北村氏がどこかで「明石の伯母」と書いている人もときどき遊びに来て同じようなことをいっていた。この人は家では「おりかはん」と呼んでいたが、縞のおめ

しの着物を着て角火鉢の前で煙管で刻みタバコを吸う粹な人であった。祖父の目からすれば、新劇なんか素人芝居に毛のはえたようなもので、大学出身者のするまともな職業とは到底思えなかったであろう。前にもいったように、祖父には新劇だけでなく、芝居や文学といったフィクショナルな世界は性に合わなかったのである。

ところが皮肉なことに、その息子である父は、経済学部に属してはいたが、学生時代から文芸の同人誌を出したり、新劇や外国文学やフランス映画にうつつをぬかしていたのである。

私が字もまだ読めない頃に、『キンダー・ブック』や『講談社の絵本』を買ってきてくれたのは主に父だが、両親は別居していたから、それを読んできかせてくれるのは主に祖母だった。それも多くは寢床に入ってから読んでくれるのだが、余程寝つきのよい人とみえて、三分の一ほど読むともうウトウトしかけるのである。それを横からつついて「それから」、「それから」と催促するのだが、半分ほどすると「もう明日」と寝込んでしまうのがつねであった。

両親が同居するようになってからは、もっぱら父が本を読んでくれた。そのなかでもとくに印象に残っているのは「青い鳥」であった。それは絵本ではなくて、昭和二年から三年（一九二七—八）にかけて近代社から出版された『世界戯曲全集』であるから原書の飜訳である。それを日曜日になると姉と私とを前に座らせて十五か二十分位ずつ読んでくれるのである。それは、私が小学校に入る前の歳か、あるいは小学校に入った頃のことである。この全集は全部で何巻出たのかは知らないが、父の書棚には四十冊ほどが並んでいた。各巻の背文字は、希臘編、独逸篇、佛蘭西現代劇集等々すべてが漢字表記だから、「青い鳥」がどの巻にあるのかは全く見当がつかないのだが、何回かするうちに

なんとなくこの巻だということがわかってくる。日曜日になると、まちかねたように、それをとり出してまだ寝ている父の枕元にもって行って「これ読んで」とせがんだ。いまにして思えば、原書の翻訳などどこまでわかったのかは疑問に思うが、それに強い興味をもっていたことは確かである。

小学校に入って宿題や勉強をみってくれたり、文房具や本や自転車などを買ってきてくれるのもすべて父であった。父の買ってくれるものは、母とはちがっていつも上等なものであった。

服装や身だしなみにもうるさかった。「ボタンがはずれている」、「靴が汚れている」、「バンドの端が垂れている」と注意された。父はオシャレな人であった。都会人としての自負心が強かった。そしてなによりも自分の容貌にうぬぼれをもっていた。祖父にはマザー・コンプレックスの素質が隠されていたとしたら、父にはナルシストの傾向があった。明治生れの男なのに鏡をみるのが好きであった。この点もいまの若ものと似ているところがある。質実剛健などとはおよそ縁遠い人であった。

ただいまの若ものと全く違う点は、読書家であったし、やたらと本を買うのが好きなことだ。そのうち何分の一をほんとうに読んだのかは知らないが、私もその大きなおかげを蒙った。やはり昭和二年（一九二七）に新潮社から出版された『世界文学全集』や、昭和三年（一九二八）に改造社から出版された『現代日本文学全集』、同じく昭和三年に出版された『世界美術全集』などは、それぞれがかなりの巻数があるが、その他の単行本の大半も、戯曲、演劇論、文芸書である。ほかに目をひくのは昭和三年に改造社から出版された『マルクス・エンゲルス全集』、その翌年に白揚社から出版されたレーニンの『唯物論と経験批判論』、河上肇氏の著作など左翼関係の本もかなりある。当時日本の大衆に風靡しだしたマルクス主義にも無関心ではおれなかったようだ。そうした単行本のほかにも、

『中央公論』、『改造』、あるいは小山内薫関係の『劇と評論』、『築地小劇場』等々の雑誌をかなり沢山残している。これらの多くは学生時代のものだし、前にもいったように学生結婚だから、生活費や学費のほかに、こうした本の購入費も全部祖父からせしめたものだ。

そして、官庁に勤めるようになってからも本買いは止まらなかった。定期購読の雑誌のほかに、しばしば本屋に立ち寄っては気に入ったものがあるとすぐに買ってきた。だからかれの残した本や雑誌の数はかなりの量にのぼっている。

私が、それらの父の蔵書を読み出したのは、もちろん中学校に入ってからであるが、その手はじめは谷崎潤一郎や芥川龍之介などの作品であった。これらを通して私は中学校の一年生の時から小説の面白さにひかれるようになった。それからは車輪が坂をころがり落ちるように急速に小説の世界にのめり込んでいった。日本文学であれ、外国文学の翻訳であれ、面白そうなものは片っ端から引っぱり出して読みふけた。まさに耽溺の状態だった。そういう状態がつづくと、精神のある種の側面だけが早熟になって、友達のいうことも幼稚に思えるようになってきた。中学生の工場動員がはじまる頃になると、私は二ヶ月くらいは三菱電機にいったが、あとは肺門淋巴腺を患って敗戦まで家で寝ていた。寝ていてもすることがないから朝から晩まで毎日毎日小説ばかり読んで暮らしていた。単行本ばかりではなく、古い『中央公論』や『改造』を毎朝四、五冊とり出してきて、各冊ごとに三篇ぐらいのついている小説を読み耽けた。それが毎日の日課となった。それらはすべて父の本であるから、私よりも一世代前の文芸思潮に私は完全に染め抜かれたことになる。もちろん、古典に古いも新しいもないともいえるが、それに少年期の柔軟な感覚や思考が染め抜かれてしまつと、戦後の新しい感覚や

文体になじみにくくなることも確かである。

そうした過去の体験をのちにふり返って思ったことは、やはりプラスとマイナスとの二面があるということである。よくいわれるように、人間性の涵養や人生観の多角性を形成するうえで文学の効用は確かに大きい。その点文学や小説になじまない人と話していると面白さも豊かさもないと感じることがしばしばある。文学や小説は、「人間」の理解にとって大きな効用をもっている。それはまた、フィクションな世界に遊ぶことのたのしさや、人間の意識や精神のなかにフィクションなものがいかに大きな位置をしめ役割を果たしているかも教えられる。もし、世界に文学や美がないとすれば、生きていることの意義の多くのものが失われてしまうであろう。それは人間を確実に無味乾燥の世界に追いやってしまうであろう。それでは人間としての生きがいもない。

けれども、その魅力にとりつかれると、麻薬中毒のような危険性をもっていることも確かである。私は麻薬遊びをしたことがないから、その快感や陶酔感がどんなものであるのかは実際には知らないけれども、ことに少年期に文学や小説の世界におぼれ込むと、現実とフィクションな世界との区別がつかなくなつて、精神や意識がフィクションな世界に吸い寄せられ、それには感動や興奮や興味を覚えても、日々の現実世界は全く色あせたつまらないものに思えてくるのである。それはある種の現実逃避となつて現われてくる。私は、どうやら中学生の頃からそうした傾向をひきづつてきたように思われる。そして大学に入つて反省させられたことは、沢山小説を読んだおかげで活字を読むスピードだけは他人に負けないほどあるけれども、自分が非常な感覚人間になつていて、論理や科学的思考が弱いということであつた。その克服がその後の私の大きな課題であつた。

私をはじめて新劇を観たのは、おそらく敗戦の翌年であったか新協劇団の「イワン雷帝」であった。それは土方与志演出で土方つま子や薄田研二の主演であった。これは神戸で上演されたものだが、関西では殆ど大阪の旧朝日会館や旧毎日会館でしか上演されなかったから、姉と二人でよく大阪まで観に出かけた。それらの入場券はすべて父が手配してきてくれた。

また、戦後は、戦前のフランス映画の名画も多く上映された。ジャン・ギャバン、フランソワ・ロゼ、ルイ・ジューベ、デート・リツヒなどの名優に魅せられたのもその頃である。「外人部隊」、「モロッコ」、「格子なき牢獄」、「望郷」など、父の世代の人たちが青年時代に魅了された映画に、私たちも同じように大きな感動を覚えた。

そして、大学に入ってから、また大学に就職してからも、私の演劇と小説の趣味はやむことがなかった。その意味で、私は父から決定的に大きな影響を与えられた。私にとって父は、同世代の友人よりも、精神的には最も親近性を感じられる人であった。

こんな昔の思い出を書いていると、無性にもういっぺん父に逢いたい、話したいという思慕の念が抑えようもなくこみ上げてきて、歳がいもなく涙がこぼれ落ちそうになってくる。私は、父に愛されたと同じように、父にたいして深い敬愛の情をもっている。そして、父の子であったことをなによりも幸福であったと思っている。

私の育った家庭は、丁度私の生れた頃から昭和の大恐慌によって家が傾きはじめた。それは日本経済史のながれのなかのひとつの宿命のようなものであったといえよう。その宿命のなかで祖父は経済

的には失敗したとしても、強靱な精神と知性をもって立派に生き抜いたといえる。敗戦の秋に祖父が老衰で静かに息をひきとったとき、私は巨木が倒れていくような気がした。それは、日本の近代においてひとつの時代が終りを告げるとともに、私の家もまたひとつの時代の終焉であった。

しかし、売り喰いの時代は、それによつては終らなかつた。敗戦という大きな悲運につづいて、こんどは戦後の激しいインフレーションというもうひとつの大きな波がわれわれの生活を襲つた。それによつて、ヤミ屋商売でもないかぎり、正常に生きている多くの国民は極度の生活難においやられた。そのなかで生きていくためには、まだ売り喰いをつづけなければならなかつた。骨董屋を呼んできて、香炉や中国製の磁器、塗り碗や蒔絵の印籠、武器や書画などを少しずつ売っていかなければならなかつた。こうした家財を手放していくことは、生きていくためにやむを得ないことだったから、先祖に申し訳ないというよりは、こうしたものを残してもらつたおかげでなんとか生きていけるといふ気持のほうが強かつた。

けれども、こうした美術工芸品を手放していくことには一抹の無念さもあつた。この種のものは生活の必需品ではないにしても、それらの美術工芸品や磁器には、永年にわたつて鍛えられ磨かれた職人の繊細な技法と、洗練された美意識とが遺憾なく息づいている。それを手放すことは、生活のなかから「文化的価値」を喪失していくことである。

人間の生活とは、生活必需品だけがあればよいとか、便利で快適であればよいというものではない。ほんとうに「人間らしい生活」とは、種々の精神的文化的価値を生活のなかにどうひき入れてくるかということがなければならぬであらう。それによつて、ほんとうに人間らしい生活の

豊かさや格調とがそなわってくるであろう。「生活の向上」とは、そうした精神的な豊かさをはぐくむものでなければならぬように思われる。

私は、いま自分の育った家庭をふりかえってみて、経済的には没落の過程を辿ってきたと思う。しかし、そうした経済的な状態のなかでも、子どもには不自由な思いをさせたくないという親の気持を、いろいろな思い出を通して痛いほど感じる。

太平洋戦争のはじまる少し前に、母は祖父のイギリス製のフロック・コートをつぶして私のオーバー・コートをつくってくれた。それは小学生の子どもには全く分不相応な立派な生地のものであった。私は先生に「お前いいオーバーを着ているなあ」といわれたが、その実は、廃物利用であって、出来合いのオーバーを買う金を始末したにすぎないのだ。また、昭和二五年（一九五〇）頃に買ってもらったオーバー・コートは、明治何年かの拾円金貨が七〇〇〇円くらいに売れたのを、そっくりオーバー代にあてられたものだ。こちらは、いまから思えば重い悪い生地のものであった。

私は、経済的には逆境であっても、そうした両親や祖父父母の温かい心遣いがいかに有難いものであったかを身に沁みて感じる。「いつくしみ育てる」という平凡なことが、親と子との精神的な強い絆をつくるうえでも、子どもの人格形成にとっても、また人間として生きていくためにも、いかに重要で大切なものであるかを身を通してしみじみと感じる。

私がいつかは生を終え、生れ育った家族の人びとと一緒に葬られることに甘美なイメージや満足感をもつことが出来るのを、私は一番有難くも、また幸福であったと思っているが、そうした思いも、所詮は「家族の人間関係」に由来することなのである。「家族の人間関係のあり方」というものは、

それぞれの人生にとって何ものにも替えがたい決定的な意義をもっている。私は、それを社会学者の口先だけの理論としていつているのではない。私の生きた体験を通していつているのだ。

二 学生として

しかし、私は家族の人間関係に恵まれただけではなかった。私の人生にとって有難くもまた幸福であつたと思うことは、学生として立派な先生にめぐり合うことが出来たし、大学に勤めるようになってからも、実に多くの大学の内外の先輩の先生方から並々ならぬ御支援や御厚情を賜わつたことにある。学生たちとも学窓を巣立ってから三十五年にもわたるながい人間的な絆をもつてきた。そして、おそらくこれからもその関係は私が生を終えるまで続いていくであろう。私が自分の人生が幸福であつたと感じることは、これらの人間関係に恵まれてきたことにある。

小説や演劇に耽溺していた私は、大学に行くにあたつて文学部以外には考えられなかった。しかし、大学に入って私の思考に新しいものが加わつてきた。それは社会科学的な関心であつた。

世は「民主化」の時代であり、それとともに大学や労働運動のなかではマルクス主義が大きな力をもつようになつていた。そのような社会風潮のなかで、私は、明治維新から敗戦に至る「近代日本」とはいつたい何であつたのだろうか。また、そのなかでの「日本の家」とは何であつたのだろうかといふことが大きな疑問となつた。それは、それまで生きてきた戦前・戦中の自己の体験を、もつと社会科学の広い視点から客観的に見直したいという欲求と結びついていた。

しかし戦後の出版事情はきわめて貧困であったから、こうした知的欲求や関心を満たすような新刊書を手に入れることは全く出来なかった。だから戦前の父の蔵書のなかから今度は社会科学の本を引き出して読むはかばかかった。といっても、かれの社会科学書は、多くは経済学に関するものであったし、当時学生の間で風靡していたマルクス主義的風潮からしても、日本経済史の概説的知識を得たいと思った。そこで昭和九年（一九三四）に出版された平野義太郎氏の『日本資本主義社会の機構』や、昭和十三年（一九三七）に発行された土屋喬雄・岡崎三郎氏の『日本資本主義発達史概説』などを讀んだ。前者は講座派、後者は労農派に属する著書であるが、当時の私にはどちらの見解が妥当であるかという評価など出来るわけもないし、その党派的な立場に関心などあるはずはなかった。とにかく私が知リたかったことはその客観的な諸事実であった。

しかし、このような経済史的知識だけではもの足りなさを感じた。これまで文学や演劇に関心をもってきた私には、人びとがそれぞれの時代や社会のなかで、どのような「精神」をもって生きてきたのかということに関心をもってきたから、経済史的知識だけでは、それらの関心と直接に結びつけるにはあまりにも距離がありすぎた。この二つのものを結びつけるためには、その中間に社会史や文化史というものがなければならなかった。

そんなことを父と話しているときに、父は昭和二十二年（一九四七）の雑誌『世界』をとり出してきて、それならこれを読んでみたらどうかと教えてくれた。それが同誌に掲載された丸山真男氏の論文「超国家主義の論理と心理」であった。同時に川島武宜氏の『日本社会の家族的構成』（一九四八）も「これもいいぞ」といって私の前に置いた。後者は小さな単行本であったが、当時の出版物がすべ

てそうであつたように、学生書房から出版されたこの初版本も紙質や装丁は、戦前の本と比べるときわめて粗末なものであつた。だが、私はこの二つの著作に、これまでに感じたことがない新鮮な魅力を感じた。また、私の関心に対してより直接的な回答を与えてくれるように思った。そしてこの二つの著作は、それから後の私の関心や方向づけに大きな影響を与えた。

私をはじめ「社会学」なるものに接したのは、教養課程での内藤莞爾先生の講義であつた。先生は、社会学史の概説を、総合社会学、形式社会学、文化社会学の三つに区分して講義をされた。私は、そのなかで「文化社会学」なるものに興味を覚えた。この講義に触発されて、私は尾高邦雄氏の『社会学の本質と課題』（二九四九）を買つた。それが私が一番最初に買った社会学の著書であつた。

私は、社会学を勉強したいと思つて文学部に入つたのではない。正直いつて社会学の何たるかも知らなかつたし、文学部に社会学専攻があることも私の眼中にはなかつた。ただ文学や演劇論に対して関心をもつていたので文学部を選んだにすぎなかつた。

しかし、一年半の教養課程が終つて専門課程に進級するにあたつて専攻を決めなければならなくなつたとき、私には文学や演劇論を専攻しようという気は無くなつていた。それにはいくつかの理由があつた。

そのひとつは、当時「文学の社会性」ということがさかんに論じられていた。その主張からすれば、私は少年時代から小説や演劇の世界に耽溺してきたけれども、社会科学的な知識があまりにも乏しかつたことに気づいた。それは大学に入ってから芽ばえはじめた社会科学的な関心とも結び合つていたといつても、これまで耽溺してきた文学や演劇の「趣味」を捨てようとは決して考えなかつたが、そ

それを「学問」として本格的にやっていくためにはもつと社会科学の勉強をしなければならないと考えた。

いまひとつは、私はそれまでに、映画のシナリオらしきものや小説らしきものを書いたことがあるが、自分の書いたものに非常な自己嫌悪を感じていた。それはこれまでに読みつづけてきた作家の沢山の小説や戯曲によって目だけは非常に肥えているが、その目からすると自分の書いたものはどうにも稚拙で読み返すのも嫌になるようなしろものだったからである。たのしいのは、作家の作品を読んでいる時であって、自分が書くものには全く自己嫌悪と苦しさばかりを味わってきたのである。文学評論や演劇評を書こうとすると、とたんに身構え緊張してしまつて、たのしいどころか苦痛であることをイヤというほど経験していたからである。私にとつて、小説や演劇は唯一の「趣味」なのであつて、それを「本業」に変えることは、私にとつて「趣味」としてのたのしさがなくなつてしまふことを意味する。当時の私にも、「趣味」としてやることと、「専攻」としてやることとの区別はついていた。小説や演劇は私の趣味としてとっておきたかったのである。

くわえて、丸山真男氏や川島武宜氏の著作に対する強い関心からいつて、内藤先生の講義で聞いた「文化社会学」が魅力あるように思えたのである。私が、「社会学専攻」を選択した動機は、そのようなものであつた。しかし、それがのちに私の職業となるとは夢にも考えなかつた。当時の私には、将来具体的にどのような職業分野にすみたいというような考えは全くなかつた。当時の私の頭をしめていたのは、「人間いかに生きべきか」というようなきわめて抽象的な煩悶であつた。

社会学専攻を決めたとき、それが何であるのかをもつと知らねばならないと考えた。そのとき私は、

さきの尾高邦雄氏の著書を唯一冊だけもっているにすぎなかった。幸い、その当時新制中学校建設用地として裏山を神戸市が買ってくれ、翌年にはその東側の山地も失対事業のために神戸市が買ってくれる話がついていたから、母も気が大きくなって、本代として一万円もらった。当時、学術書の値段は通常三百円くらいであったから三〇冊くらいの本が買えた。それで私は神戸の古本屋をまわって社会学という標題のついた本を買い集めた。一番高価で大部なものは新明正道氏の『社会学辞典』（二九四四）であった。同氏の著書では『知識社会学の諸様』と『社会本質論』。松本潤一郎氏の『現代社会学説研究』、『社会学原論』、『集団社会学原理』、『文化社会学原理』。難波紋吉氏の『米国文化社会学研究』と『文化社会学と文化人類学』。田辺寿利氏の『佛蘭西社会学史研究』、『コント実証哲学』、『言語社会学』。本田喜代治氏の『フランス学派中心・哲学及び社会学研究』、『コント研究』。それに石川三四郎訳の『コント実証哲学』、田辺寿利訳の『デュルケームの社会学的方法の規準』、土屋文吾訳『コントの社会の再組織について』。高田保馬氏の『社会学概論』をはじめ『社会と国家』、『国家と階級』、『民族論』など、とにかく手当たり次第に買ってきた。それらを順番にペラペラと頁をめくって面白そうに思えるものを読んだ。私には、松本潤一郎氏と難波紋吉氏の著書、そして本田喜代治、田辺寿利氏のフランス社会学に関する研究と翻譯とが一番関心があつた。ただし、本田喜代治氏の『コント研究』を読んだとき、コントの人柄については、「変った人」という印象が強く残って好きにはなれなかった。

私が学部在学中に神戸大学にいらっしゃった社会学の先生は、さきの内藤莞爾先生のほかに、樺俊

雄、堀喜望、金澤實、杉之原寿一先生、陸井四郎の諸先生であるが、内藤先生は九州大学文学部に転出され、かわって西村勝比古先生が就任された。樺先生は、社会思想史、歴史社会学、文化社会学の講義をなさったが、その本領は知識社会学、イデオロギー論であった。先生が昭和十八年（一九四三）に出版された『歴史哲学序説』を古本屋でみつけてその学問の軌跡の一端をはじめて知った。私には、先生の「歴史的観点」ということが一番強く印象づけられた。金澤先生には、ギンズバークの外書講読とアメリカ社会学説、内藤先生には社会調査、西村先生は政治社会学、杉之原先生には教育社会学を習った。

しかし、私が社会学をはじめるにあたって一番強く影響を受けたのは堀喜望先生であった。最初に先生から教わったのは、マリノフスキーの『文化の科学的理論』の外書講読と、文化人類学史の講義であった。この文化人類学史の講義はのちに『文化人類学』（一九五四）としてまとめられたが、その初版本は『人類学講義——人間と文化の理論——』という標題であった。

この著書の「はしがき」でもふれられているように、堀喜望先生は、京都大学文学部哲学科の御出身で、田辺元氏のもとで歴史哲学の研究から出発された。私は田辺元氏の著書については『懺悔道の哲学』しかみたことがないが、『岩波茂雄伝』で描かれている若き日の田辺氏の姿や、門弟の方が雑誌『思想』に書かれている随想をみると、その学問や生活規律の厳しさは、まさに鬼気迫る思いがした。その門下で助手をつとめられていたためか、堀先生のマリノフスキーの原典の読み方は甚だ厳格で、ひとつひとつの言葉に詳しい註釈と解説をつけられた。一語たりともゆるがせにしないとい

う態度がひしひしと感じられた。それまで多読・乱読ばかりしてきた私は、はじめて本とはこういう読み方をしなければならぬのだということを教えられた。また、先生は、概念定義の精確さや論理にはきわめて厳格であった。文化人類学史の講義でも、その時代的背景や多くの理論系譜の脈絡をたどりながら、それらを鋭くかつ深く掘り下げて講義をされた。その講義は、高度な専門家においてはじめて正確に理解し感銘を与えるものであっても、われわれのような無知蒙昧な学生には、その何分の一も理解しえていなかったであろう。それはなによりも先生御自身が一番よく御存知なことであつたろう。けれども、そんな学生に対しても先生は力を抜くようなことは決してなさらなかった。そこに先生の学問に対する、また大学教師としての「良心」があつた。講義の内容は、正直いってどこまで理解しえたかは大いに疑問だが、いかに無知蒙昧な学生であつても、そうした先生の身体から発散される雰囲気だけはひしひしと感得させられるものがあつた。学問とは大へんなことなのだということが身に沁みて感じられた。

私は、先生の講義に接しはじめた頃、古本屋で『思想』や『哲学研究』に書かれた先生の若い頃の論文とめぐり合つて嬉しい気がした。先生の書かれた文章に最初に接したのはそれらの論文であつた。先生はその内奥にきらめくような鋭い光を放つ才気といった資質を秘められた方であつた。それをそのまま表現されると「美は乱調にあり」といったきらびやかな文体となつて現われたであろう。しかし、先生は、その才気を生のまゝに表現されなかつた。その才気は「格調」のある文体のなかに押え込まれていた。この文学的才気と哲学的思考との二つの微妙なバランスが、一方では古風なまでに格調の高い文体でありながら、同時にそれを生彩あるものとしてわれわれの前に示された。文章の端々

に先生の繊細な神経が張りめぐらされていた。それによって文章は立体的で重厚な感じを与えた。まさに「立派な文章」という一語に尽きる。

くわえて、私は先生の御人柄にも非常に魅力を感じた。先生のお名前の「喜望」よしもち」というのは、私になんとなく公家の名前を連想させた。それは先生の風貌のもつ品格と結びついていたのかもしれない。しかし、私はどなたかに「堀さんの家は、もと金澤藩の本身の家老の家だ」ということをきいてびっくりした。およそ武家とか武門の末裔という武骨さは微塵も感じられなかった。さらに先生の御尊父がかつて海軍の将官であったことを知って二度びっくりした。しかし、先生の育たれた家風をかいまみた思いがしたことが一度あった。私は学生の頃京都の先生のお宅を訪問したとき先生は御不在で先生のお母様が玄関に出てこられた。なかなかの風格のある方で、玄関の式台にぴたっと座られた。その姿勢は見事なものであった。そして両手を前に揃えて深々とお辞儀をして、「もどりましたら、さよう申し伝えます」といわれた。その堅苦しいまでに古風な姿勢には威厳があった。私はそれに圧倒されて這這の態で逃げ帰った。

しかし、先生も明治四三年（一九一〇）のお生まれだから、大正デモクラシーの雰囲気をついに身につけたような方である。リベラルで人間的なやさしさがある。私の父よりは三歳若くていらつしやるけれども、同じような「時代の雰囲気」が感じられた。先生はみずからの年譜に記されているように（『堀喜望先生退官記念論文集——社会学の諸問題——』、第三高等学校在学中に社会科学研究会に加入していたことや全学ストライキの關係で退学になったことは私たちにも話された。私はそのことについてたち入ってお話を伺ったことはないが、その当時の時代的雰囲気は、野上弥生子氏の昭和

七年（一九三二）の作品「若い息子」から察知することはできる。しかし先生は御両親の影響で聖書研究会のメンバーでもあり、哲学青年であるとともに、文学青年でもいらっしゃった。また新劇にも関心を寄せていらっしゃったようである。そうした親近性が、私に父親に対すると同じような一種の「甘え」を感じさせた。講義のあとで先生は研究室でくつろいだ姿勢でいろいろなことを話して下さった。私はそのお話に非常に興味を感じた。友人と話しているよりは正直いってずっと面白かった。その頃学舎は阪神御影駅の北側にあったが、御影の近くの喫茶店や三宮の喫茶店に誘っていただいたこともよくあった。京都のお宅にお邪魔して夜おそくまで座り込んでいたこともしばしばあった。先生の奥様はまだ若くて美しくて明るくてやさしい方であった。必ず手のこんだ夕食をふるまわれた。奥様は東京音楽学校の御出身でもとてもきれいな魅力的な声で話されたが、それは音質だけでなく多分にまろやかな御人柄とまじり合ったものである。

右も左もわからぬような頼りない学生の私に、先生は慈父のような暖かいやさしさをかけて下さった。私は、それをいいことにして、甘えっぱなしであったような気がする。それから後も、私が神戸大学の助手に採用され、先生が昭和四九年（一九七四）に神戸大学を定年退官なさるまでお側にあって公私ともにいろいろと深い御厚情を賜わった。それは四半世紀にわたった。先生が定年御退官になった翌年、私は文部省の海外出張でタイ、フランス、イギリスに行ったが、旅先で私が見聞いたことを、なぜか先生に話したかった。だからせっせと旅先から先生に手紙を書いた。また、定年御退官のあとも、ときどき神戸や京都の喫茶店やレストランでもお目にかかった。そんなとき、先生は、私がいくつになっても学生の時と同じようにおごって下さった。私が六十歳ちかくなってもそうであつ

た。さすがに私は気がひけて、「私ももう六十ですから」といったが、先生は「まあ、ええがな」といつて払って下さった。私は、そんなとき、いつまでたっても私は先生にとつては学生なのだと思うた。その関係は終生変わらない。

あるとき、間宏氏が、「先生とほんとうに呼べる人にめぐり逢えたことが一番有難い。それは滅多にないことでしょう」といわれた。それは有賀喜左衛門氏と間氏との関係を意味しているのであろう。私は「ほんとうにそうですね」といいながら、堀先生と私との関係が頭に浮かんだ。

もちろん、私は堀先生だけにお世話になったのではない。金澤實先生からもいろいろとお世話になったし、お宅にお邪魔したこともしばしばあった。また西村勝比古先生からも大変可愛がっていた。西村先生は、非常に人なつっこい御人柄の先生であつた。堀先生はオシャレで紳士的な姿勢をくずされなかつたが、西村先生はあまり風態をかまわない、ざくばらんの方だった。先生はコーヒーよりも酒が好きだった。だから学生をつれてよく呑み屋にいかれた。私もよく誘われたが、私は酒をほとんど呑まない。それは先生も御存知のことだから、「キミ、おでんでもどうだ」とか、「なにか適当にみつくろつて」といつていつも細かな氣遣いをして下さった。先生はひとりで盃を傾けながらいろいろな話をして下さるのだが、酒が深まるにつれて同じ話が二度三度と出てくるようになる。私は殆ど素面だから、ああこれで三度目だと思う。四度目になると返事するのもいささか面倒になって黙っていると、「なあ、キミそうだろう」と念をおされる。あわてて「ハア」というと、また別の同じ話が繰り返されるのである。あれにはいささか閉口したが、先生の暖かいお人柄は非常に魅力的で

あった。

杉之原寿一先生との関係が深くなっていったのは、むしろ私が神戸大学に就職してからであって、ただ一度だけ先生が神戸市番町の部落調査をなさったお手伝いをしたことがあった。私は、杉之原舜一氏のお名前は『河上肇の自叙伝』でも、学問的業績のうえでもときどき拝見していたから識っていたが、それがまさか杉之原先生の御尊父だとは夢にも思わなかった。先生が京都大学人文科学研究所の助手から神戸大学の講師として赴任されたのは、まだ二十九歳のときだから非常にシャープでクールな風貌をなさった青年教師であった。

助手の陸井四郎先生は、座談の名手のような方で、さすがに江戸っ子のせいか、軽妙洒脱でユーモラスな話をして学生を煙に巻いて、あとはついとどこかに消えていかれた。

居安正、光吉利之両氏は同期である。

私たちの学生時代は、まだ戦後の混乱期が大きく跡をひいており、世相もきわめて不安定であった。各企業で大規模な人員整理があり、ストライキが頻発した。三鷹事件、松川事件、そしてレッド・パージなどの大事件が相ついで起こった。そのなかで、人びとの心もすさんでいた。とにかく、かつて軍国主義を信じて戦場に駆り出された青年たちが敗戦による価値観の大転換のなかで受けた心の傷は深かった。あるものはニヒリスティックな心情におち込み、あるものは過激な学生運動に身を投じた。世間は、そんな青年たちを「アプレゲールの世代」といった。そこには、伝統的な価値観・教養に反抗しようとする青年たちの粗野な行動に対するある種の批判が含まれていた。そんな世相のなかでも、私たちは、教養と人間性の豊かな先生方に恵まれたのは、ほんとうに有難いことであつた。

私は、大学を卒業するようになって、具体的な職業の目標をなにも持っていなかった。生活さえ出来ればどんな職業だって適当にやるさというくらいに気持ちしかなかった。たまたま私が中学校に入学以来ずっと数学を教えていただいた青柳忍先生が生田中学校の教頭をなさっていて、来ないかというところでそこに就職した。青柳先生の御尊父はキリスト教の牧師だということだが、中学校の教ある先生方のなかでもすぐれて峻厳、曲ったことは絶対許さないという方であった。字まで四角ばっていた。私は小説に耽溺するようになってから、数学はまことに苦手であった。ある試験で問題が二つ出て、上の方の解答はマルかと思ってみると零点の零の字だった。そんな私を、先生は何を思われたのか誘って下さった。私はおそるおそる「ハイ」といったが、内心では「えらいことやなあ、勤まるかしら」と思った。しかしいってみると、さすがに先生も歳をとられて人間が丸くなっていた。生田中学校は、文部省が新制中学校のモデル・スクールとして全国で東京、仙台、神戸に三つつくった学校のひとつで、校長は大ボスで朝と夕方には必ず学校に戻っていたが殆ど留守であったから教頭の青柳先生がすべてを切り回しておられた。それにもきわめて有能な先生だった。私は教頭の横に席を与えられたが、窮屈な思いがした。はじめは生徒に「先生」といわれても、自分のことだとは気がつかなかった。それに、私たちが育った旧制中学校と新制中学校とは様子がまるで違っていた。一時間中自分の席にじっと座っておれないような生徒も一クラスに二、三人はいた。慣れない新米教師には手こずることが多くて疲れてしまった。家に帰るとグツタリする日が多かった。夏休みになって家で小説を読んでいると、この世の天国と思われた。イガクリ頭の生徒は可愛いけれど、私には教師としての心の準備さえ出来ていなかったし、まだもっと本を読みたいという気持ちが強かったから、青柳先生

にはまことに申し訳なかったが、一年でやめさせてもらって早稲田大学の大学院に入った。

私が、早稲田大学大学院を選んだのは、武田良三先生の『社会学の構造』（一九五二）に接したことが一番大きな理由である。この著書は、私が学部を卒業する前年に出版された。それまで文化社会学や文化人類学に関心をもってきた私は、武田先生のこの著書に親近性と魅力を感じていた。

院生たちは、武田先生をかげでは「オヤジ」と呼んで慕っていたし、先生もオヤジのように学生の面倒をよくみておられた。院生の間の人間関係も濃密であった。秋元律郎氏は一年うえて、児玉幹夫、安藤喜久雄、河津哲也、荒井久弥の諸氏が同期である。佐藤慶幸氏は私より三歳、下田直春氏は五歳若い。なんの機縁からか古くから識っていた。正岡寛司氏と親しくなったのは比較家族史学会においてである。武田先生の外書講読はズナニエツキの『社会学の方法』であったが、この予習は毎週熱心にやった。林三郎先生等とパーソンズの『社会システム論』と一緒に読んだが、これには手こずった。私は、デュルケームの社会学理論が一番好きだったし、社会学の本質がなんたるかを知ったのもデュルケームからであった。それにアメリカの文化社会学や文化人類学を教わったおかげで、その内容には比較的接近しやすかったのだが、いかんせんパーソンズの背後にある分析哲学については全く理解がなかった。その点に一番難渋した。といって、当時はまだその方面の哲学研究は日本では非常におくれていたから参考にする本もなかった。ああでもない、こうでもない、と皆で頭をひねって難渋した。パーソンズの『社会的行為の構造』や『行為の一般理論に向って』のほうはまだとりつきやすかった。修士論文を書くときは、まだ大部な論文を仕上げるまでには私の考えもまとまっていなかったし成

熟もしていなかったから難渋した。このとき修士課程を修了したのは池田昭氏と私の二人だけだったから、その面接試験は午前中が池田氏、午後は私だけで時間がたっぷりあったから、あれこれと突っ込まれて全く冷汗三斗の思いがした。しかし、大学院の二年間は、先生だけでなく、ほんとうにいい友人に恵まれて幸いだった。

三 教師として

昭和三十一年（一九五六）に、それまで神戸大学文学部の社会学専攻の助手であった陸井四郎先生が、教養部に社会思想史の講座が新設され、その講師として転任されたので、そのあとに私が文学部助手として採用された。それから三十八年間神戸大学に勤務させてもらった。年齢にして二十五歳から六十三歳までだから、私の人生にとっては最も重要で、かつ最も長い歳月を神戸大学とともに過ごしてきたことになる。この三十八年間の思い出を書きたいことは沢山ある。それをひとつひとつ書いていけば優に何百ページかの本になるであろう。ことに、この間には神戸大学の文学部をはじめ他学部多くの先生方、そして他大学の先生方とも昵懇にさせていただいていろいろとお世話になった。せめてそれらの先生方にたいする謝辞だけでもこの際申し述べておきたいのだけれども、それも紙数の関係で割愛せざるを得ないのが一番心苦しい。

私が神戸大学の助手に採用された当時は、学舎は阪神御影駅の北にあつて理学部と、教養の御影分校と同居して設備の面では貧弱な状態にあった。しかし教官は錚々たる教授陣と新進気鋭の助教授に

よって非常に充実していた。哲学は武市健人、三田博雄、岡田正三、井上庄七、芸術学は小林太市郎、谷信一、辻部政太郎、日本史は今井林太郎、阿部真琴、高尾一彦、東洋史は内田吟風、岩見宏、伊藤道治、西洋史は田中正義、井上幸治、市川承八郎、弓削達、地理学は石川栄吉、国語国文学は永積安明、猪野謙二、島田勇雄、英語英文学は山本忠雄、工藤好美、神津東雄、谷口陸男、ドイツ文学の加藤一郎、言語学の井上増次郎、中国思想史の山口一郎などの先生方であった。助手にも哲学の青木靖三、日本史の長倉保、西洋史の中村賢二郎氏らの大助手がおられた。社会学は、すでに樺先生が東京外国語大学に転任され、堀、金澤、杉之原の諸先生にくわえて、清水盛光先生が京都大学人文科学研究所と兼任教授として赴任された。社会心理学には登山家として著名だった高木正孝先生がおられた。文学部長は創立以来今井林太郎先生であった。

設備は貧しくとも、人間の面では非常にいい環境にあり、これらの先生方は私にとっても親切に厚情をもって接して下さったし、学生もいまよりはずっとこい関係にあった。パーソンズの『行為の一般理論に向けて』をテキストにして外書の講読会をつくったり『ソシエテ』の雑誌をつくったり、また一緒に遊んだりした。『ソシエテ』が、のちに本誌の母体として発展するのだが、そのことはすでに本誌第一〇号で書いたので、ここでは省略する。ただ、私の人生において幸福だったと思うことのひとつは、やはり三十八年の間に多くの学生に接することが出来たことだ。

私が接したのは、かれらにとっては教養課程から進級してきて卒業するまでのわずか二年半の期間にすぎないのだが、その間はいずれの人生にとって重要な意味をもっている。二十歳前後の多感な青春期の学生時代をどう過したかは、それぞれの人生の生涯にわたって貴重な思い出となって追憶され

るであろう。学生時代は、人生において最も感受性の豊かな時期であり、それだけにこの時期にどのような精神的影响を受けたかは、それぞれのその後の人生にとって大きな痕跡としてひきずっていくであろう。その精神的な影響は教師と学生、そして学生間の友人関係という直接的な人間関係を通して感受されることが大きい。ことに、学生時代におけるそれらの人間関係が充実し、たのしく豊かなものであったか否かということが、学生時代の追憶において決定的なものとなるであろう。それは、これまでに述べてきたように、自分の体験にもとづいてもいいものである。教師という職業が、「聖職」といえるかどうかは知らない。しかし、その職業は「人間」を対象にしている。「もの」を対象としているのではない。「人間」は「もの」よりもずっとずっと貴重である。「もの」は人間にとつての「条件」にすぎない。その意味で、「教師」という職業は、あだおろそかにしてよいというものではない。

私は、昨年の「社会学研究会ニュース」に「二つの言葉」という随想のなかで、そのひとつとして、「正師を得ざれば学ばざるにはしかず」という道元の言葉を引用した。それは熱烈な求道精神をもつて中国に渡った道元が「正師」をもとめて各寺院を巡錫し、最後に名僧如浄とめぐりあつて悟りをひらいた感慨を述べたものだ。如浄とのめぐり逢いは、道元の人生にとって決定的な影響を与えた。その機縁にめぐり逢うことがなければ、かれは悟りをひらくことはなかったであろう。そこには、師としての如浄の呵責なまでに厳しい訓育と慈愛に満ちた態度と、たとえ身は滅びても悟りに達したいという道元の熱烈な求道の精神との両者の強い結合がある。この両者の結合関係のなかに「教育」というものの神髄があるように思われる。それは、国や文化の違いを越え、時代がいかにうつり変わろうと

も「教育」というものの普遍的な根幹であるように思われる。

もちろん、教師と学生とは対等の関係にあるのではない。対等の関係にあるのなら何も高い授業料を払って学びに来る必要もない。教師も給与をもらいう資格はない。両者は教える者と教えられる者の関係である。だから、教師と学生との関係においては、教師の「責任」の方が圧倒的に重い。道元は、「師の正邪にしたがいて悟に偽と真とあり」ともいつている。教師が正であるかぎり、その弟子の悟りは真になり、教師が邪であれば弟子の悟りは偽となる。

一口に教師といってもさまざまな人がいる。いい加減な教師につくと、学生がいかにいい素質や能力をもっている、それが伸ばされ成長することはない。逆に歪められる。教師のそうした態度は、学生のほうにシワ寄せさせられ、被害を蒙るのは学生のほうだ。そうした事例を私はいくつもみてきたから、ほんとうに教師であることは怖ろしい気がする。その責任の重大さを痛感させられる。

私は堀先生のそばに永らくいて、先生が研究者として立派なだけでなく、教育者としても真剣に学生にたち向かわれてきたことに敬服し尊敬の念をもってきた。先生は学生に対して身体を斜に構えるということとはなかった。その深い学識と教養と慈愛の心をもって学生と真正面から立ち向かわれた。

先生の厳しさは学問だけではなかった。人間としての精神や倫理・心情、そして社会的なしつけや礼儀についても厳しかった。それは「人間の教育」をめざすものであった。だから、学生の側にしてみれば「厳しい」とか「こわい」とか「うるさい」と感じたことも少なからずあったであろう。しかし、そうした先生の気持は、余程愚鈍な学生でないかぎり、その心の奥底に必ず届き沁み込むものである。人間の関係というものはそうしたものである。私は、先生が神戸大学を去られ、古稀、喜寿、傘寿と

年齢を重ねられても、かつての教え子たちが遠くからかけつけてくることに、先生に対する敬慕の念がいかに強いかを目のあたりにみてきた。先生にとっても、それは「教師冥利に尽きる」ということであらう。私は、この「教師としてのあり方」ということについても、先生から教えられることは多かった。私が教師として実際になしえたことは、先生がなさってきたことには遙かに及ばないものであったことは確かである。しかし、先生のなさってきたことが、教師としての私にとっては大きな目標であり指針として、それにむかって努力してきたことも確かである。

私は、助手に採用されてからも、アメリカ社会学を中心にした理論社会学の研究をつづけた。これについては、堀、金澤、西村の諸先生からいろいろな御教示をいただいた。そして授業を担当するようになってからは、それまで金澤先生が担当なさっていた「社会学史」を受けもった。しかしこの授業は正直いって非常に苦痛なものであった。というのは、若い時は、ある程度自信をもって講義が出来る範囲は非常に限られた狭い範囲のものにすぎない。しかし社会学史は、とにかくコントからはじまってパーソンスに至る欧米の主な社会学理論の流れを通して、社会学の対象や方法について話さなければならぬ授業科目である。当時はごく限られたものしか翻訳書はないし、それぞれの理論についての専門研究書もきわめて貧弱であった。だから原書を読むほかにないのだが、それを読むのも、またどうまとめたらいのかということも全く四苦八苦しなければならなかった。ときには、他人の意見をそのまま丸呑みして補充するのだが、授業中に話しながら、「あれ、これはおかしい」と気づくことがある。そんなときは全く慌てて意気沮喪する。また、明け方まで準備していてもどうしても

まくまとまらないで、ついに「風邪で休講します」とかなんとかいったこともあった。なんとか恰好がつくようになったのは、そんなことを十年以上も積み重ねてからのことであった。しかし、これはほんとうにいい経験であった。金澤先生が定年御退官後に、私は「社会学概論」を担当したが、あの経験の積み上げがなければ、とても「社会学概論」なんかの授業は担当出来なかったであろう。

このような学説史の研究をつづけながら、同時に私が若い頃からやってきたのは、産業社会学の実証的研究であった。そのはじめりは、杉之原寿一先生を中心にして、鉄鋼産業における技術革新と、それにとりまなう管理組織、労働力の質、職場の集団、および労働者の意識の変化の問題であった。その対象は、阪神間の鉄鋼業であるが、当時大手の企業はそれぞれに技術革新の競争が激しい時期であったから、それが他にもれては困るというので調査を断られたこともあった。同じようなことを、高砂市の各種の企業について実証調査をおこなった。

また、関西学院大学の小関藤一郎先生や萬成博先生が中心になって灘酒業の技術革新の調査もおこなった。これには西山美瑳子、遠藤惣一、牧正英の諸氏も参加した。関西学院大学は、同じ兵庫県下にある隣の大学であるから密接な関係にあった。私は助手の頃から大道安次郎先生や余田博通先生、定平元四郎先生等とは昵懇にしていたし、また同じ年齢層では倉田和四生、宇賀博の諸氏とも親しい関係にあった。小関先生とは、産業社会学の関係のほかに、デュルケムについての先生の御見解に多大の御教示をいただいたし、デュルケムに関する先生の著書や多数の論文、翻訳書もいただいた。

私は、灘酒造業の調査を契機にして、日本の産業発達史を社会学の観点からもっと広く知りたいと

考えて、杉之原先生と一緒に兵庫県大塩から赤穂にかけての塩業調査も行った。これは近世からつづいた入浜式塩田が、流下式塩田へと技術革新され、のちには工場式製塩へとめまぐるしく変化していく過程であった。私が調査を行ったときは、すでに流下式塩田に変化していたが、古い入浜式塩田のことが知りたくて杉之原先生と香川県丸亀まで見学に行ったのもなつかしい思い出である。

さらに、神戸商工会議所の依頼で、神戸の小零細工業であるケミカル・シューズ工業の調査も行った。神戸は明治以来、マツチ工業が地場産業として盛えたが、これは華商資本と結びついた小零細工業であった。それが第一次大戦前後に衰退し、それにかわって神戸の地場産業となったのがゴム産業である。それについては、明治末年にイギリスのダンロップ社のゴム工場が神戸に出来たのが大きな契機であるが、その底辺に多数の小零細工業としてケミカル・シューズ工場が群生したのである。その産業構造はある意味ではマツチ工業の再生であったといえる。

さらに関西学院大学の萬成先生に誘っていただいて水島コンビナートの調査にも参加した。それは、われわれがかつて阪神間の鉄鋼業において産業合理化―技術革新の進行過程についてみたものが経済の高度成長期を経て完成していった姿であった。生産工程や労働者の状態は、かつてみたのとは完全に異っていた。これらの実証調査によって、私は、近世的な伝統産業から、中小零細工業、そして現代のコンビナートという巨大産業の実態を知ることが出来た。

もうひとつ杉之原先生のお手伝いとしてやったのは部落問題の研究である。杉之原先生は、すでに私が学生時代から神戸市番町の実態調査をはじめられ、私も学生としてその調査に参加したことがある。先生はそれ以降もこの問題について農村や都市の実態調査をつづけておられ、ことに昭和四十五

年（一九七〇）頃からは、この問題に集中的にとり組まれていた。私は、先生から個人的にはいろいろのお話を伺ってはいしたが、その問題にかかわることはなかった。しかし、先生が文学部長に就任され非常に慌しくなったために、そのお手伝いをだんだんと頼まれるようになった。当時、この問題を資本主義的な「階級問題」として扱う理論傾向がつよかったが、私はそれに納得出来なかった。その問題の本質は「身分問題」にあるのであって、それが明治以降にも強く残存しつづけたところに「近代日本」の特質がある。私は、大学に入学した当初から、明治維新から敗戦に至る日本の「近代」とは何であつたかという問題に関心をもっていたが、「家」にしろ、「部落問題」にしろ、あるいは近世的伝統産業の存続にしろ、それがまさに近代日本の旧体制の特質を示すものにはかならなかったのである。この問題も、私にとっては、そうした観点から大きな問題であつたことは確かである。

最後に私がとり組んだ大きな問題は「日本の家」の問題であつた。この問題は、私が大学に入つて社会科学的な関心が芽ばえた当初からの関心事であつた。それは私自身の体験からいっても、また日本の近代文学の一つの大きなテーマであつたことからいっても、さらに川島武宜氏の『日本社会の家族的構成』に強い刺激をうけたことから、私にとっては大きな問題であつた。したがって、私は学生るときから、中川善之助、青山道夫氏等の法社会学者による家族制度史の研究や、クランジュの古代ギリシャ・ローマの家族制度の研究、あるいは清水盛光先生の『支那家族』（一九三九）や『家族』（一九五三）、そして有賀喜左衛門、喜多野清一先生らの著作も折にふれて読んできた。しかし、「日本の家」を單純に家族としてとらえることにも、また経営体としてとらえることにも、納得しえないものがあつた。家をめぐる諸事象には、この二つの見解からはどうしても説明しきれない問題が

残されているように思われたのである。そうした問題関心を抱きつづけながらも、それに本格的にとり組んでいく余裕も機会も私にはなかった。私は、理論社会学講座に属し、社会学史を担当することに四苦八苦していたし、同時に産業社会学の実証調査に専心していたからである。

私にそのキツカケを与えて下さったのは、関西学院大学の余田博通先生であった。このことは、余田先生の追悼論文集『村落社会』（一九八五）でも、拙著『日本社会の基層構造』（一九九二）でも詳しく書いたので、ここでは省略する。私は、これを契機にして、長野県の佐久地方を中心にして、近世初期以来の農民の「家」についての実証的・歴史研究にとり組んでいった。この過程で、古文書等の実証的史料の蒐集とともに、日本法制史、日本史学、民俗学など、およそ「家」に関係する著書・論文をむさばるように読みつづけた。この実証調査には、当時大学院生であった竹内隆夫氏や藤井勝氏等の大きな協力を得た。また、文献面では、神戸大学の今井林太郎・八木哲浩先生の『封建社会の農村構造』（一九五五）と、同じく神戸大学法学部の大竹秀男先生の『封建社会の農民家族』（一九六二）は、私の研究にとって大きな支柱であった。大竹秀男先生は、大学紛争時に私が文学部の補導委員をしていたときの全学の学生部長であって、その関係からもお世話になったが、のちに『比較家族史学会』ではさらにいろいろとお世話になった。この学会に所属することによって、私は江守五夫先生をはじめ多くの先生方と昵懇にしていた。だいた。

私が、日本の「家」を問題にするのは、ひとつには、それが日本の「社会構造」の特質を解明するうえでキー・コンセプトだからである。そして、それを「歴史的」な視点から解明しようとしたのは、日本の家をもつ特質の原型は、近世初期の本百姓を代表名義人とする「一軒前の家」に顕著に示

されているので、この「一軒前の家」とは何かを明確にしないかぎり、日本の「家」のもつ特質は明らかにならないからである。それは、家族や経営体をその内部に含みながらも、それ自体は、それらを越えた社会的性格をもつものなのである。

私は、欧米社会学の理論から、「構造分析」という基本的視点を学んだ。しかし、私はそれをさらに「歴史分析」とどう結合させるかということに「歴史社会学」の課題があると考えている。そして、そうした視点こそ、もとはといえば、樺先生や堀先生が若き時代に関心をもたれた歴史哲学とは無関係であるとはいえない。私は、それを哲学としてではなく、社会構造の歴史的変動として実証科学として確立されるべきだと考えるのである。

大学の本来の使命は、研究と教育にあるけれども、それがひとつの「組織体」を構成しているかぎり、大学の教官にとってのもうひとつの大きな使命と責任は、大学の管理・運営ということにある。それは、文学部のように、いくつもの専門科学で構成されている場合、各専攻の教室をどう運営していくかという責任がつねにつきまとう。そのことに無責任であったり、判断に誤りがあると、その専攻は発展しない。そんな例を私はいくつもみてきた。しかし問題はそのレベルだけにはとどまらない。ときには学部全体、大学全体の管理運営ということにも不可避的にかかわらざるを得ない。

私は、助手に採用された翌年に教職員組合の中執をやらされた。これは文字通り「やらされた」のである。というのは、文学部のように小規模な学部では三年に一度くらいの割合でなんらかの組合役員の仕事が回ってくる。それも若手教官がまずやらされるのである。最初は当時文学部の支部長であ

った山口一郎先生が、「あなた中執をやってくれますか」といわれて右も左もわからないままに中執の会議に出た。しかし当時の私は組合用語さえ知らなかった。例えば「チューダイ」といわれてもなんのことかもわからなかった。それが「中央代議委員会」のことだとわかったのは、しばらくたってからである。こんな状態をくり返しているうちに、二度も組合の副委員長をやらされ、あげくの果ては委員長もやらされる羽目になった。はじめの副委員長のときは、のちに教育学部長になられた杉山明男先生が委員長で、つぎのときは中国文学の権威である一海知義先生が委員長のときであった。両先生は非常にシッカリされた方であるから、私は若干そのお手伝いをしてただけで気が楽であったが、委員長になるとやはり責任の重荷を感じて精神的にシンドイ思いをした。大学紛争の時は文学部の本田創造先生が委員長で私は一委員にすぎないのだが、研究室が近いために、「ちよつとこの文書を書いて」とか、「ちよつとこれして」といって使われた。本田先生の御尊父は、名古屋大学文学部の社会学の初代教授であった本田喜代治氏である。

しかし、こうした関係を通じて、私は他学部 of 先生方と多く知り合うことが出来た。大学紛争時の学長であった戸田義郎先生や学生部長であった大竹秀男先生はさすがに偉いと思った。また、ほかにもさすがに偉いと思う先生方とも多く知り合うことが出来た。そんなことでもなければ、それらの他学部の先生方と知り合うことはなかったであろうと思うと、それは幸運でもあった。

私はまた、大学紛争時に、堀喜望先生が文学部長であったとき、補導委員をやらされた。「やらされた」というのは、この場合も委員や役職などは教授会の選挙で決めるからいやおうもなく、他律的強制的なのである。このときに一番心配したのは学生の身体 の安全ということであった。ガラスを破つ

た、校舎にペンキで落書きしたということくらいなら、あとでなんでも始末できるが、ゲバ棒でなぐり合って、もし失明したとか、頭に損傷を負ったということがあれば、これは生涯とりかえしのつかないことである。そのような危険性が多分にあるような情況だった。私は幸い学生からイジメられるというようなことは全くなかったが、なにが起るかもしれないという不安感でいつもイライラして胃の調子がずっと悪かった。

大学院文化学研究科（博士課程）で岩見宏研究科長のもとで大学院委員をさせられたときも、高尾一彦文学部長のもとで評議員をさせられたときも、あまりシンドイ思いはしなかった。

新野幸次郎学長のもとで学生部長をしたときには、やはりいろいろなことがあった。それまで四代の学生部長が苦労なさってきた学寮問題はおおむね解決していたので私はこの問題で大した苦労をすることはなかった。しかし神戸大学は三つの大きな学寮と留学生会館とを抱えているから、学生の身体を守るためには細心の注意を払うことが第一であった。万一人身事故でもおこればとりかえしがつかない。けれども学生というものは、いつの時代でもいつ火事が起こっても不思議でないような呑気な生活をしているのである。この点は全くヒヤヒヤさせられる。

それに外国人留学生の増大にともなって、その宿舍や奨学金などの支援をどうするかということが大きな問題であった。われわれとしては、折角日本に来たのだから、勉学の面でも生活の面でも「日本に来てよかった」という気持をもって帰国してほしい。しかし、私費留学生のなかにはみるに忍びない状況にある人も少なくはなかった。その実情をみて、なんとかしなければと痛感した。幸い、新野学長が先頭になって「兵庫地域留学生交流推進会議」の設立を県・市をはじめ民間諸団体に呼びか

けられ、地元の御支援を仰ぐことになった。これは全国の大学のなかでは神戸大学が一番早い。さすが国際港都神戸だけあって、こうした呼びかけに県・市をはじめ多数の諸団体から熱意をもって御協力戴き、宿舍や奨学金あるいは交流活動で多大の御支援を戴けるようになったのはほんとうに有難いことであつた。

私のときから大学入試の複数受験がはじまったが、入試の問題は少しのミスも許されない。つねに百点満点でなければならぬので非常に細心の注意を払わなければならない。これも氣骨の折れる仕事である。

そのうえ、一万人以上の学生を抱えているといろいろな問題が起こる。登山していた学生が予定の時間に帰ってこない、急流でボートが転覆して地元の方に救出されたというようなことが、帰宅してヤレヤレと思つているところに電話がかかってくる。クラブのコンパで酔つ払つた学生が公の掲示を破つてしまった、タイコやトランペットの音がうるさい、学生会館前の学生の乗用車やバイクをなんとかしてくれ等々の苦情がもちこまれるのは日常茶飯事である。また、外部の学生が入り込んできて暴力事件を起こすこともあつた。学生会館横の私有地にマンションを建設するという話がもち上つて来たときはほんとうに困つた。それが実現すれば、マンションの住民と学生会館を利用する学生側との間にトラブルが続くことは必至である。この件は学長の御尽力で有力な同窓の方から御寄附を戴き大学の所有地になったことはほんとうに有難いことであつた。そんなことを繰り返していると、帰宅してから何が起こるかもしれないという不安感が頭を去らなかつた。

それにしても、私のようなものが大過もなく任期を勤められたのは、ひとえに新野学長をはじめ、

入試委員や諸委員の先生方、そして職員の方々の御尽力と御支援のおかげであった。

学長はそばで拝見していても非常な激職である。それを新野先生は御自身の健康もかえりみず全く献身的に処理されていった。それは超人的ともいえるものであった。全体に対する目くばりといい、人に対する思いやりや気くばりといい、余程の修養を積まないと通常の教師ではあれほどまでには出来なかった。まさに「名学長」であった。私はそばにいて人間的にも学ぶことが多かった。

最後に、文学部長に選任されたときは、私は正直いつて困惑した。私は社会学の堀先生や杉之原先生が学部長として苦勞されたのをそばでみてきたから、それがいかに大へんな仕事をよく知っている。堀先生の時は大学紛争の末期とそのあと始末の時期であり、新学舎の増築ということもあった。杉之原先生の学部長時代は、その前任の清水正徳学部長のあとを受けて大学院文化学研究所（博士課程）の設立とその学舎の増設ということがあった。そして私の前任者の木内孝学部長のときからは、教養部解体という大改革がはじまった。木内学部長は非常に聡明な判断でそれ进行处理していた。私はとてもそのような苦勞に堪えられそうもなかった。

しかし考えてみると、今井林太郎先生からはじまって、山本忠雄先生、加藤一郎先生、清水正徳先生など歴代の学部長も、それぞれに大きな問題を抱え、非常な御苦勞をなさってきたのを私はずっとみてきた。文学部が今日あるのはその御尽力のおかげである。それを思えば、私だけがシンドイなどといっておられるものではない。とにかく「出来るだけの努力は致します」という以外にはなかった。それが永い間お世話になった文学部や神戸大学に対するせめてもの私のつぐないであった。

私は、助手の時代からずっと教室の事務的な仕事を処理してきたから、その種のことは得意でもな

いし好きでもないが、苦痛でもない。しかし、一口に「改革」といっても、その内実は正直いって大へんな仕事である。大きなキシミが生じるし、下手をすると「改革」ということが「改悪」になりかねないことは世間にざらにあることである。そして大学の制度というものは、一段決まるとそう簡単に変えられることもない。将来のことを考えて目前のことを処理していかないとんでもないことになる。それは大きな「責任」と「ストレス」をとまう仕事である。そのうえ、神経をすり減らすような事件まであった。週五コマの授業も分担しつづけねばならなかった。正直いって疲労困憊した。後任の池上忠治学部長が決ったとき、ほんとうに肩の重荷がおりたようなホッとした気分になった。テレビで駅伝競技をみていて、走者が次の走者にタスキを渡すときの姿に自分のザマが似ていると思った。しかし、これもなんとか勤められたのは、木内前学部長をはじめ多くの文学部の先生方から御支援をいただき、また全学的には鈴木正裕学長をはじめ他学部の学部長の先生方から多大の御厚情を賜わったおかげである。心から感謝と御礼を申し上げたい。

私が生きた時代は決して平穏な時代ではなかった。昭和初期の大恐慌からはじまって、満州事変―日中戦争―太平洋戦争と戦争ばかりが続き拡大していった。そのいきつくさは敗戦という日本が曾て経験をしたことのない事態に陥った。それからも生活の窮乏や世相の混乱は長くつづいた。そんな時代の流れのなかで、よく今日まで生きてこられたというのが率直な感想である。そして経済の高度成長以降は、物質的な窮乏からは脱出したものの世相はめまぐるしく変化し、新しいストレスが生じる時代となった。精神的にはそれだけ落着きとゆたかさを失ってしまったように思われる。

そうした「時の流れ」のなかにあつて、私が、この六十三年間の自分の人生を幸福であつたと思えるのは、ひとえに私をめぐる多くの「人間関係」にめぐまれたことにある。私は、そのことを一番有難くも思い、それらの方々に心から深堪な感謝の念を捧げたい。

「人間関係」ということは、社会学にとつての最も基本的な研究対象であり課題である。しかし、私は、いまみずからが生きた体験をふりかえつて、この問題が、それぞれの人生にとつていかに決定的に重要な問題であるかを身に沁みて感じる。「よき人間関係をつくる」ということは、何ものかの「手段」ではなくて、そのこと自体が人生にとって重大な「目的」のひとつなのであり、そのために努力することは、「人間として」課された大きな目標のひとつなのである。私が、六十三年の人生を生き、また社会学を学び、多くの文学や演劇から学んできた結論は、結局そういうことであつた。私は、コントの人物が好きになれなかつたといったが、かれが最後に、社会の基礎を「愛」にもとめたことに、私も近づいてきたのであろうか。私の人生をふり返つて、強いて唯ひとつの言葉を求められるならば、私はやはり「愛ありてこそ」という言葉を選びたい。